

## 2025 年 12 月 28 日 説教「何も思い煩わないで」

### ピリピ人への手紙 4 章 4～7 節

本日は 2025 年の年末礼拝です。「明日のための心配は無用です。」(マタイ 6:34)を覚えつつ、ピリピ人への手紙 4 章から学んでいきます。ピリピという地はエーゲ海を南にのぞむ、マケドニアの主要都市でした。マケドニアのフィリポス 2 世(アレクサンダー大王の父)が金鉱開発のために、城塞都市として発展させました。彼は自分の名前にちなみピリピとしたのです。後に、この地はローマの植民地となり、2 人の長官が統治していました(使徒 16:35)。新約聖書時代、ピリピは軍事的にも通商的にも重要な位置を占め、マケドニアの地方では第一の町となっていました。住民はローマ人が退役軍などの軍関係を中心に約半分、ギリシャ人が約半分でした。ユダヤ人も少数いました。パウロはこの地を、第二、第三伝道旅行で訪れ、教会形成にあたりました。

### 1. 主にあって喜びなさい (4～5 節)

#### ①喜びなさい (4)「いつも主にあって喜びなさい。」

使徒パウロは新約聖書のローマ人の手紙から連なって、ピレモンへの手紙までを記しました。その中で、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙は、獄中書簡と呼ばれます。獄中で記したのだからです。獄中という背景を考えながら、この書を読んでいくと、なかなか味わい深いです。この部分も、パウロが獄中にいながら、「いつも喜びなさい」と勧めているのは驚きです。ここに「主にあって」とありますが、どんなに肉体的につらくても、主とともに歩き、主によって導かれる時に、そこには本来的な喜びがあることを知りたいのです。

#### ②再度の勧めで、喜びなさい (4)「もう一度言います。喜びなさい。」

ピリピ人への手紙は喜びの書簡と言われます。これまでも喜びという言葉は再三出てきましたが、ここでは、前の節で伝えた「喜びなさい」と言う言葉を確認するようにして伝えているのです。喜びは、御霊の実であることをパウロは述べています(ガラテヤ人への手紙 5:22)。

#### ③寛容な心 (5)「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。」

ガラテヤ書にある御霊の実として記された二番目は喜び、そして四番目が寛容です。5 節では「寛容な心を、すべての人に知らせなさい」とあります。生れながらの私達は傲慢で、怒りっぽいです。しかし、御霊によって導かれていく時に、受け入れる心、相手の言わんとすることを理解しようとする心が生まれます。寛容な心はキリストを知らせる大事なポイントにもなります。なにしろ、再臨の主が来られる日が近づくまでに、福音は全世界に宣べ伝えられなければならないからです(マタイ 24:14)。

### 2. 思い煩わずに祈る (6 節)

#### ①思い煩わず (6)「何も思い煩わないで、」

「思い煩う」というのはメリムナオーという言葉ですが、それは心配するこ

とであり、心配ごとのゆえに心の中が混乱することです。ここでは、思い煩うことに否定の言葉がつくのです。それも「何も」とあるのは、この否定の言葉がメーという強い言葉だからです。私達は思い煩うことをどこかで容認していますが、それが否定されているのです。

②感謝をもって (6)「**あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、**」

それでは、思い煩わないで、どうするのかといえば、どんな場合であっても、感謝をもって祈りと願いをささげていけということです。思い煩いの心が湧いてきたならば、祈りへと向かうということです。感謝を伴った祈りをささげよということです。ここにおいて、あらゆる場合にという言葉が、ずしりと控えています。つまり、実生活においては、感謝できない事柄が生じてくるのです。しかし、その場合でも感謝することを試みていけということです。

③神に知っていただく (6)「**あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。**」

「あらゆる場合に感謝をもって祈る」というのが、合理的ではないと思えるかもしれません。しかし、何であれ現実的に思い煩いを与えている問題は横たわっています。だとするならば、思いの向かう先を、思い煩う自分自身ではなく、神に向けよということです。そして、思いのたけを神に伝え、願うべきことは神に願えということです。

3. 神の平安が心を守る (7 節)

①神の平安 (7)「**そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、**」

思い煩わずに、思いのたけを神に知っていただく道筋の結果はどうなるでしょう。神の平安です。それは、人間が思い描くようなものではなく、人間の側が短絡的に考える結果や、深く考えた末に想定される結果などのすべてを越えている、神の平安だということです。神の平安ですから、源は神です。神がもたらしてくださる平安です。

②キリスト・イエスにあって (7)「**あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**」

お言葉が神の平安が与えられると続くのかと思いきや、神の平安は守るということです。何を守るのかといえば、私達の心や思いを守るということです。つまり、思い煩いが悪さをしようとしても、神から与えられる平安は、弱い人間の心と思いがサタンの手には落ちないように守ってくれるということです。それらは、決して人間の力によるのではなく、キリスト・イエスにあってそうなるということです。

《展開と結論》

今年の御言葉はマタイの福音書 6 章 34 節冒頭の「明日のための心配は無用です」でした。何を食べるか、何を飲むか、何を着るのかと心配する者たちに、まず神の国とその義を求める時に、すべてが与えられると教えられた主は教えられました。その上で、だからこそ心配は無用だと宣言されたのです。

私たちは現実生活において、心配しやすい者たちです。思い煩いの沼にはまるとなかなか抜け出せません。自分のうちで、次から次へと問題を作っ

ていってしまうのです。想定することも、思いめぐらすことも有益なこともあります。いたずらに考えすぎれば、心のなかに傷みをつくってしまいます。今朝の御言葉はそんな私達に何も思い煩わず、あらゆる場合に感謝をもって祈りをささげて、心のうちを神に知っていただきなさいということです。とはいえ、思い煩っている私達は、何らかの思いにとらわれてしまっていて、そこから離れられません。ですから、何も思い煩わないでといわれても、思い煩っているときは何をいわれてもそこから脱却しにくいのです。しかし、ここに「あらゆる場合に」とあり、どんな場合でも脱出の可能性があることが示唆されています。その秘訣として「感謝をもってささげる祈りと願い」とあります。難しい事態のなかにも、感謝できることをあるだろうから捜してごらん、といっているのです。

「パレアナの青春」という本があります。少女パレアナは、喜びの遊びを始めるのでした。つまり、いろいろなケースについて喜んでいくゲームです。たとえば、私達が何らかの試練にあった場合に、その試練を通して人の気持ちを知ることができたと喜んで喜ぶ……。確かに私達の人生には問題もありますが、それを通して学ぶこともあるのです。そして、その難題を主なる神に知っていただくなら、人知でははかり知ることのできない神の平安が私たちを守ってくださるのです。コリント人への手紙第一 2 章 9 節にこうあります。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである」とあります。「主の山に備えあり」です。

週のクリスマス礼拝において学んだ、マリヤが御使いに告げられたことは、受け入れにくいことでした。これを彼女が人間的に考えたらどうでしょう。とんでもないことが起きそう。もう逃げ出すしかない。ああどうしよう……。とマリヤが思い煩ったらどうなったでしょう。しかし、彼女は思い煩うことなく、御使いに真正面から対話したのです。いわば、主に祈ったのです。「神にとって不可能なことはありません」というお言葉もいただき、彼女は「お言葉通りこの身になりますように」という信仰告白が与えられたのです。

私自身も心配性の面があります。しかし、今朝の御言葉によって何回も助けられてきました。この年を終えるにあたって、あなたの心配、思い煩いを捨てて、感謝すべきことをまずは感謝し、内にある思い煩いをそのまま神に申し上げていきましょう。そして、人知を超えた神の平安をいただいてまいりましょう。